

○現代語訳について

訳出に際しては、学術上の知見に照らしてなるべく正確な訳文となるよう心がけた。つまり、現代日本語の文章として文学的に洗練されたものをめざしてはいない。意訳を避け、原文の語順もなるべくそのままとなるよう努めている。ただし、あまりにも意味がとりにくくなってしまうような場合は、その限りではない。また、以下のような原則にもとづいている。

- 一 時制、待遇表現などは、できるだけ原文に近くなるよう努めた。なお、地の文の文末をすべて敬体（いわゆる「です・ます」体）で訳すことはしない（本書の解説を参照されたい）。
- 二 作中人物の呼称については、原則として当該部分前後の原文にみえる呼称をそのまま訳文の中でも用いることとし、適宜（ ）内に通称を添えた。また、原文では多くの場合主体が明示されていないが、訳文ではこれを適宜補った。
- 三 作中人物の心内の言葉は、明確に当の人物の心内の言葉としてくれる場合と、そうではない場合（語り手もしくは書き手の言葉としてもとらえる場合）とがある。本書の現代語訳では、試みに、前者の部分には実線の傍線を付し、後者の部分については点線の傍線を付した。ただし、特に後者については微妙な部分が多く、異なるとらえ方もありうることを認めなくてはならない（本書の解説を参照されたい）。

四 現代語訳は、陣野英則（桐壺〈総合〉、山中悠希（薄雲〈若菜下「二二」〉、有馬義貴（若菜下「二八」〉〈椎本〉、中西智子（総角〈夢浮橋〉）の四名で分担し、全体を陣野が調整した。

※ 読解の便を図るため、広汎に流布する『新編日本古典文学全集』全十六巻（小学館、一九九四～一九九八年）の章段番号を、本文・現代語訳のいずれにおいても小見出し（巻名のあと）に示しておく。

目次

凡例

本文・注釈編

現代語訳編

※上段の頁が「本文・注釈編」に、下段の頁（ゴシック体）が「現代語訳」にそれぞれ該当する。

①桐壺「二」	11	181	②桐壺「二」	12	181	③桐壺「四」	14	183
④桐壺「二二」	16	184	⑤桐壺「二二」	17	185	⑥帝木「二」	18	186
⑦若紫「二」	19	186	⑧若紫「九」	20	187	⑨若紫「一二」	23	189
⑩若紫「二四」	25	190	⑪紅葉賀「二」	28	192	⑫須磨「二」	30	194
⑬須磨「二五」	31	195	⑭須磨「一八」	35	198	⑮須磨「二二」	37	199
⑯明石「二」	40	201	⑰明石「四」	42	202	⑱明石「八」	44	204
⑲明石「二二」	49	207	⑳落標「四」	50	208	㉑総合「八」	52	209
㉒薄雲「二六」	55	211	㉓薄雲「一八」	57	213	㉔少女「三三」	59	214

源氏物語主要人物系図	300
図版	299
解説	291

⑥7 総角 [二]	138
⑦0 総角 [一〇]	143
⑦3 早蕨 [四]	148
⑦6 宿木 [二三]	152
⑦9 宿木 [四七]	157
⑧2 東屋 [二〇]	160
⑧5 浮舟 [二]	164
⑧8 浮舟 [二五]	167
⑨1 蜻蛉 [一一]	171
⑨4 夢浮橋 [二]	175
⑥8 総角 [三]	139
⑦1 総角 [三二]	144
⑦4 宿木 [三]	149
⑦7 宿木 [二九]	153
⑧0 宿木 [四九]	158
⑧3 東屋 [三九]	162
⑧6 浮舟 [二六]	165
⑧9 浮舟 [二五]	169
⑨2 蜻蛉 [一二]	173
⑨5 夢浮橋 [八]	176
⑥9 総角 [七]	141
⑦2 総角 [三六]	147
⑦5 宿木 [七]	151
⑦8 宿木 [四六]	156
⑧1 東屋 [二]	160
⑧4 東屋 [四三]	162
⑧7 浮舟 [二四]	166
⑨0 蜻蛉 [四]	170
⑨3 手習 [三一]	174
⑨6 夢浮橋 [一二]	178

②5 胡蝶 [二]	61
②8 梅枝 [八]	70
③1 藤裏葉 [二二]	74
③4 若菜上 [一二]	78
③7 若菜下 [七]	85
④0 若菜下 [一九]	93
④3 若菜下 [三四]	104
④6 柏木 [二三]	107
④9 御法 [一一]	111
⑤2 幻 [三]	115
⑤5 幻 [一九]	121
⑤8 匂兵部卿 [六]	124
⑥1 橋姫 [一五]	130
⑥4 椎本 [四]	134
②6 常夏 [二]	64
②9 梅枝 [九]	72
③2 藤裏葉 [一二]	74
③5 若菜上 [二二]	78
③8 若菜下 [九]	87
④1 若菜下 [二八]	98
④4 柏木 [三]	105
④7 横笛 [三]	108
⑤0 御法 [一五]	112
⑤3 幻 [一五]	117
⑤6 匂兵部卿 [二]	121
⑤9 橋姫 [二〇]	125
⑥2 橋姫 [一八]	130
⑥5 椎本 [八]	134
②7 梅枝 [二]	68
③0 梅枝 [二〇]	73
③3 若菜上 [八]	75
③6 若菜上 [二三]	80
③9 若菜下 [二七]	89
④2 若菜下 [三三]	101
④5 柏木 [八]	107
④8 鈴虫 [九]	110
⑤1 幻 [一]	114
⑤4 幻 [一八]	119
⑤7 匂兵部卿 [五]	122
⑥0 橋姫 [一二]	126
⑥3 椎本 [二]	132
⑥6 椎本 [二七]	135

ど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方がたにもいたう劣らず、なにことの儀式をもてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、事ある時は、なほ抛り所なく心細げなり。

②桐壺 二

初めよりおしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき。おほえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせたまふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑある事のふしぶしには、まづ参う上らせたまふ。ある時には大殿籠もり過ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この御子の居たまふべきなめり、

と一の御子の女御は思し疑へり。人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞ、なほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。

かしこき御蔭をば頼みきこえながら、落としめ疵を求めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。

御局は桐壺なり。

あまたの御方がたを過ぎさせたまひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参う上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさなきこともあり。またある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれ、と御覧じ

②桐壺 二 光源氏誕生

○初めよりおしなべての上宮仕へしたまふべき際にはあらざりき―源氏の母となる更衣は、帝のお側にお仕えして、當時身の回りの世話を勤めた。本来は典侍・掌侍・命婦ら女房の仕事。○さるべき御遊びの折々―管絃の遊びの折々。○「長恨歌」―承歡侍寝無閑暇春從春遊夜專夜―歡を承け寝に侍して閑かなる暇無し春は春の遊びに従ひ夜は夜を専にす(白氏文集、卷十二、感傷、五九六)を踏まえる。

○大殿籠もり過ぐして―「長恨歌」―春の宵短きを苦しみ、日高けてより起く。此より君王早朝せずを踏まえ、共寝の後も朝務を疎かにして更衣を侍らせている。

○坊にも、ようせずは、この御子の居たまふべきなめり、と一の御子の女御は思し疑へり―弘徽殿女御の心内。坊は東宮坊。疑心暗鬼の狀態を語り手が推測して語る体裁。

○疵を求めたまふ人―「紫明抄」―「なほき木に曲がれる枝もあるものを毛をふき疵を言ふがわりなさ―直立する木でも曲がつた枝はあるものなのに、髪の毛を吹いかき分けてまで疵を探し出すなんてなんて不合理なことだ」(後撰集、雜二、一五六、高津内親王)「有司毛を吹きて疵を求む」(漢書、中山靖王伝)。

○御局は桐壺なり―こまでが更衣の物語であるという、一応の擧筆。「桐壺」淑景舎の通

称で、帝の日常起居する清涼殿からは最も遠い東北の隅にあった。

○ひまなき御前渡りに―帝が、女人達の前を、いつもいつも素通りして、もともと遠いところにいる更衣の許に向くことを言う。

○げにことわりと見えたり―後宮を取り巻く人達の心内に語り手が同化した語り。

○参う上りたまふにも―桐壺更衣が帝のもとに参上するというので、の意。帝の寝所に伺候するための参上であるための敬語。

○あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさなきこともあり―女人達は嫌がらせをし、廊下に汚物を蒔いて衣裳を汚し、更衣が帝の許に向かうのを妨害した。

○はしたなめわづらはせたまふ―女御たちが示し合せて、馬道などの戸に鍵をして桐壺更衣を立ち往生させ、「わづらはせ」た。

○事につれていとどあはれ、と御覧じて―叙述視点は、更衣の俯瞰的な描写から、帝の心内へと移行し、さらに全知視点へと戻る。